

新編  
大村市史

第二卷

中世編



大歡喜信受奉行

大般若波羅蜜多經卷第六百

明應七年六月廿八日器之契實談之

上報恩下資三有法界合情同圓種智

康寧元年<sup>丁未</sup>七月廿夕有三年

永德二年<sup>壬午</sup>六月二十四日書寫畢

本尊釋迦牟尼佛 諸法神 土地十社大明神

瑞松山本來禪寺

幹縁以正信先謹書

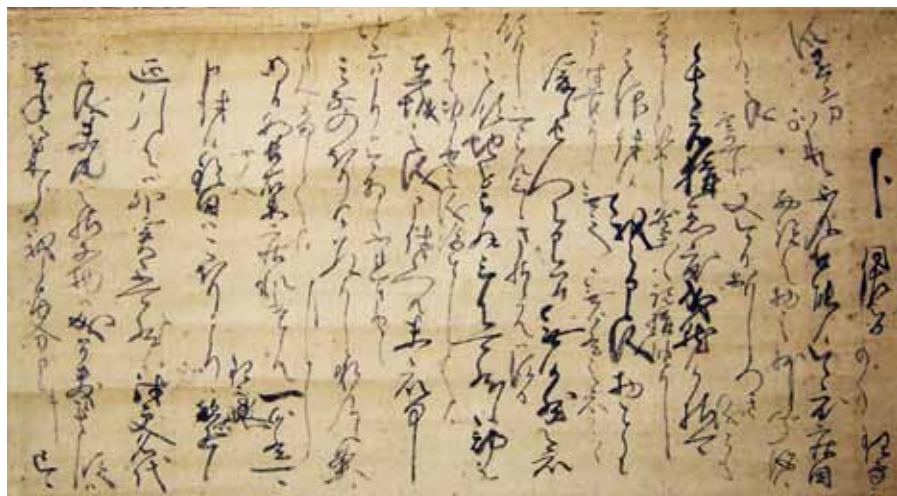
於此所州被持郡松倉村八幡宮

奉寄進大般若經一部

于時延德三年<sup>壬午</sup>三月十五日大村氏討大納言

大般若經第六〇〇卷與書 (全体)

(佐賀市 富泉院所藏)



大村純忠書状 (諸城固守二付檄文)

(大村市立史料館寄託 大村家史料 (請求番号) 403-33)



横瀬浦 (西海市西海町横瀬郷)



**Neue Zeytung auss der Insel Japonien (天正遣欧使節肖像画)**

1586年にドイツのアウグスブルクで発行された新聞に掲載された使節の肖像画。

上段右: 伊東マンショ、上段左: 中浦ジュリアン、下段右: 千々石ミゲル、下段左: 原マルチノ、中央: メスキータ神父

(京都大学附属図書館所蔵)



拓本画像B 上八竜如来形線刻石仏(大村市弥勒寺町)



菩薩像(正面)

(個人蔵)



正和5年銘 東光寺跡宝塔(大村市松原1丁目)



下茅場 石鍋製作所跡 (西海市西彼町平山郷茅場)



松尾平 石鍋製作所跡  
(西海市西彼町平山郷松尾平)



玖島城跡出土華南三彩

(長崎県埋蔵文化財センター所蔵)





三城城遠景

(大村市教育委員会提供)



松山城堀切(波佐見町金屋郷)



大村市は、昭和十七年二月十一日に一町五村が合併して誕生しました。その二〇周年を記念して、昭和三十六年に市史下巻が、三十七年に市史上巻が刊行されました。戦後という言葉が生きており、地域の歴史研究が端緒を迎えている時期でした。

その後、大村の歴史は、地域の研究者達による研究の蓄積とともに、国内の様々な研究者によって取り上げられてきました。それは、大村の歴史が、単に地域の歴史にとどまることなく、日本史・世界史において興味の尽きない内容を持っているからです。

歴史は、過去の出来事や先人たちが生きた日々を通して、現代に生きる私たちに、未来へ向かう力と可能性を伝えてくれます。大村市は、日本初のキリシタン大名大村純忠と天正遣欧少年使節をはじめとして、幕末・近代の日本で活躍した渡辺清、渡辺昇、楠本正隆などの政治家、長与専斎などの医者、原子物理学の長岡半太郎、女子教育・知的障害児教育の石井筆子など、さら星のごとく輝く人々を多く輩出してきました。

市の歴史を市民の皆さんにお伝えすることは、ふるさとを再認識し誇りを持つていただくために、大変重要なことです。私たちは、改めて郷土の脈々と続く歴史を学びながら、多くの偉人を輩出し、育んだ大村の歴史を、私たちの子や孫の世代に伝えていきたいと思えます。それは、現代に生きる私たちの使命でもあります。このため、大村市では平成二十四年に迎えた市制施行七〇周年を機に、新たな市史を刊行することにいたしました。

今回、新たに市史を編さんするに当たり、歴史だけでなく、地質、地形、生物など幅広い分野の専門家

にご参加いただき、第一巻を昨年度刊行しました。これに続く本巻「中世編」では、前巻で実力を見せ始めた武士たちの中から、いよいよ大村氏が歴史の表舞台に登場します。大村氏は激動の乱世を乗り越え、ヨーロッパ諸国に名を知らしめる大名へと成長していきます。

結びに、本編第二巻「中世編」の刊行に当たり、貴重なご意見をいただきました大村市史編さん委員及び編集委員の皆様、部会長をはじめ各執筆者の方々、関係者各位に心からお礼を申し上げます。

平成二十六年三月

大村市長 松本 崇

## 編さんの辞

最初の『大村市史』が刊行されたのは昭和三十六年・三十七年である。これは、当時の大村市長大村純毅氏の発意により、大村市市制施行二十周年記念事業の一環として企画されたもので、上・下二巻（上巻Ⅱ近世編・下巻Ⅱ近現代編）という構成で刊行された。

昭和三十年代、市町村の合併を記録・顕彰しようとする機運と相まって、県市町村史の編さんが全国的規模で推進されたなかで、長崎県においても『長崎県史』の編さんと併行して『大村市史』の編さんが企画されたのである。とくに「上巻」（近世編）は、当時の市域を対象とせず、旧大村藩領東西彼杵郡を対象に叙述したため、両郡における町村史編さんのスタンダードとなり、当該自治体史の編さんに、大きく貢献した。

昭和四十年代以降、自然科学の研究進展に伴って各地の環境が明らかにされると共に、旧石器・縄文・弥生・古墳時代を始めとする遺跡が盛んに発掘調査される一方で、御家人・荘園（彼杵荘）・在地領主・一揆（彼杵一揆）・守護・九州探題・宗教・石造文化の研究が盛んに推進された。注目されるのは、大村藩政の基本史料である「郷村記」（七九巻）・「見聞集」（七〇巻）・「九葉実録」（六四巻）が復刻され、大村藩研究の起爆剤となったことである。これを契機に、大村史談会の機関誌『大村史談』に、多数の論文が掲載された。

こうした趨勢のうえに、改めて「大村市史」を編さんすることとなり、大村市の発議で、平成二十年五月三十日、第一回の準備懇談会が開催された。次いで平成二十一年六月三十日、準備懇談会は編さん委員会に切換えられ、新しく編集委員会が組織された。

更に、各時代の班長を選出して各部会が頻繁に開催され、細部にわたって項目立てが行われた。その中で藤野が提案した「第一次原案」が補強され、その成果に基づき、随時編集委員会を開催して、全体の調整を行い、統一した方針のもとに叙述し編集することとなった。

さて、今回の市史編さんは、現大村市長松本崇氏の発意により、市制施行七十周年記念事業として企画されたもので、前『大村市史』の刊行以来、すでに五十年が経過している。市長は第一回の準備懇談会に出席し、新しい「大村市史」の編さん目標と意義について強調し、とくに地元の研究者を執筆者に加えるよう要望された。また市長は、わざわざ上京され、今回の市史編さんについて、その熱意を開陳され、その情熱に打たれた。編集委員会は、その意を付度し、多数の地元の研究者を執筆者に加えた。その意味で、本市史は大学教員と地元の研究者との連携プレーによる共同作業である。

顧みて、私が大学の卒業論文のテーマに「大村藩」を選び、研究を開始したのは、戦後間もない昭和二十四年である。当時、大村藩に関するまとまった研究は、幕末維新时期を対象とした山路彌吉編『臺山公事蹟』（大正九年刊行）があるのみで、他はギリシタンに関する若干の論文が存在する程度であり、全く先行研究なしのゼロからの出発であった。また、全国的に「藩政史」に関する研究も緒についたばかりで、参考文献（論文）に乏しく、模索の状態からの出発であった。

幸い、大村純毅氏（旧大名家）のご好意により、同氏所蔵の「大村家文書」（その代表は「九葉実録」）の調査を行う一方で、「郷村記」・「見聞集」の全面分析を試み、リュックを背負って、旧大村藩領四八ヶ村をフィールドワークし、その成果に基づいて卒業論文を書き上げたが、それは十年後執筆・編さんした『大村市史』（上巻）で具体化した。

同市史「上巻」は、近世編（Ⅱ藩政編）となっているが、その前史として大村氏の台頭から書き始め、南北朝―室町期―戦国期（中世）を対象に叙述したが、時間的制約と個人の能力の限界から、簡単に叙述す

るに留まった。今回は、前述したように、その後の研究成果に基づき、自然・原始・古代から近現代に至る長期的歴史過程の全貌について、各時代の専門家に多数協力・執筆して頂き、全体として、均整のとれた体系的叙述を志向した。とくに当該地域の歴史叙述に留まらず、広い視野から比較研究の視角を導入し、統一権力である幕府はいうまでもなく、国際環境の変化に連動させながら当該地域を歴史的に位置づけるという、自治体史の新たな視角と方法を提示した。

平成二十六年三月

新編大村市史編集委員長 藤野 保

# 中世編

## 新編大村市史第二卷 目次

### 第一章 鎌倉時代

|                             |     |
|-----------------------------|-----|
| 第一節 鎌倉時代の彼杵庄                | 1   |
| 第一項 彼杵庄における武士団の形成           | 1   |
| 第二項 御家人所領としての松原             | 27  |
| 第三項 御家人体制と在地領主の動向           | 31  |
| 第二節 蒙古襲来と信仰                 | 99  |
| 第一項 蒙古襲来(文永・弘安の役)と彼杵庄の武士    | 99  |
| 第二項 石造文化にみる異国降伏の信仰とその影響     | 108 |
| 第三節 異質石塔にみる中世の大村湾・有明海の海運    | 147 |
| 第一項 大村湾にみる異質石塔              | 148 |
| 第二項 有明海にみる異質石塔              | 159 |
| 第三項 中世の海道日本海・瀬戸内ルートと大村湾・有明海 | 162 |
| 第四節 水軍と牧                    | 175 |
| 第一項 海を生活の糧とする人々「海民」         | 175 |
| 第二項 木材と船                    | 178 |
| 第三項 大村湾と西彼杵半島における海と人々       | 179 |



## 第二章 室町時代

### 第一節 鎌倉幕府の滅亡と南北朝動乱

第一項 彼杵郡に及んだ倒幕の動き―江串三郎入道の挙兵

第二項 足利尊氏の大村氏への軍勢催促

第三項 金石文にみる大村地方の南北朝

### 第二節 彼杵一揆と彼杵荘

第一項 南北朝の争乱

第二項 中世の一揆

第三項 彼杵一揆と連判状

第四項 彼杵一揆の展開

第五項 彼杵一揆の変容と終焉

### 第三節 大村氏の出自

第一項 従来の説とその信憑性

第二項 大村氏系譜の編纂過程

第三項 大村氏系譜はどこまで史実か

第四項 大村氏の出自

第五項 大村氏系譜をまとめる

## 第三章 戦国時代

### 第一節 応仁の乱前後の大村氏と有馬氏

第一項 戦国期 大村純治・純伊・純前の系譜

第二項 有馬氏との関係

第三項 有馬氏と大村純伊の抗争 中岳合戦

### 第二節 幕府要人記録に見る大村純前の上洛

### 第三節 戦国争乱と大村氏

第一項 純忠の襲封と家臣団の分裂

第二項 開港と洗礼

第三項 改宗運動と寺社破壊

### 第四節 大村氏の領国形成と経営

第一項 領国形成と直轄地

第二項 支配機構と軍事力構成

### 第五節 龍造寺氏の台頭と大村氏

第一項 龍造寺氏の肥前支配と大村進攻

第二項 龍造寺氏の支配体制と長崎・茂木の寄進

### 第六節 領主権の喪失と回復

第一項 龍造寺氏に臣従

第二項 沖田畷の戦いと龍造寺氏からの解放

第七節 豊臣秀吉の九州平定と大村氏……………412

第一項 秀吉の知行割と九州の諸大名……………412

第二項 バテレン追放令と長崎の収公……………416

第八節 三城下町の形成……………423

第一項 「大村館小路割之図」に見る中世の館町……………423

第二項 館町から城下町へ……………431

総括と展望―中世から近世へ……………438

◇コラム◇ 後藤貴明の肖像……………448

## 第四章 対外関係(貿易・キリシタン史)

第一節 ポルトガル商船来航と大村氏……………451

第一項 横瀬浦開港……………452

第二項 大村純忠のキリスト教への改宗と内乱……………467

第三項 横瀬浦焼亡……………481

第二節 福田開港とその展開……………487

第三節 唐船の来航と唐人……………492

第四節 大村氏とイエズス会……………497

第一項 大村の教会建造とキリシタン宣教の推移……………497

第二項 長崎の開港と新町の形成とポルトガル貿易……………501

第三項 イエズス会への長崎・茂木寄進……………511

第五節 天正遣欧使節と大村氏

- 第一項 使節派遣の背景と目的
- 第二項 天正遣欧使節と大村氏
- 第三項 使節の一行について
- 第四項 ローマへの旅路
- 第五項 ローマにおける動静
- 第六項 使節の帰国
- 第七項 使節の上洛・秀吉との謁見
- 第八項 遣欧使節派遣の意義

第五章 中世の社寺と信仰

第一節 大村地方の社寺

- 第一項 神社と信仰
- 第二項 仏教寺院と信仰
- 第二節 大村地方における大般若経の写経
- 第一項 富松社辺での写経
- 第二項 肥後に移動した写経僧 令虎をめぐって
- 第三項 名護屋に移動した二つの大般若経
- 第四項 黒丸本来寺での写経
- 第五項 波佐見の僧、遠江と美濃で写経

第六項 肥前鹿島で大村純前の武運長久を祈り写経

第三節 大村地方の伊勢信仰

第一項 大村純伊の伊勢参宮

第二項 御師・宮後三頭大夫の活動と「肥前日記」

第三項 大村衆の伊勢参宮の初見

第四項 為替を使って伊勢参宮

第六章 石造物からみた中世・大村の様相と仏教文化

第一節 石造文化

第一項 石造文化と生活文化

第二項 長崎県の石造文化

第三項 異質石塔

第四項 初期石塔の三つの建塔ピーク

第二節 石塔造立階層の変遷

第一項 平安末・鎌倉・南北朝(一一〇〇年前後～一三〇〇年代後半)

第二項 室町前期(一四〇〇年代前半)

第三項 室町中期から後期(一四〇〇年代半ば～一五〇〇年代末)

◇コラム◇ 一休さんと茶臼

第三節 石塔類からみた中世の大村

第一項 分布からみた全体観



第二項 時系列上の特異性……………720

第三項 中世・鹿島の石造物―特に覚鑿上人とその影響について……………755

第四節 大村の仏像……………763

## 第七章 考古資料からみた中世

第一節 石鍋製造と流通……………779

第一項 石鍋の生産地……………779

第二項 大村湾における滑石製品出土遺跡……………785

第三項 生産地から消費地へ……………789

第二節 大村における貿易陶磁の様相と意義……………792

第一項 古代から中世前期……………793

第二項 中世後期……………796

第三項 中世末期……………800

第三節 大村市周辺における中世城館……………812

第一項 城館の分布……………813

第二項 城館の立地と形態……………815

第三項 大村氏に関する主な中世城館……………817

第四項 大村市周辺における中世城館の特徴……………840

## 凡例

- ◆『新編大村市史』は、大村市制施行七十周年を迎えるに当たり、昭和三十六、七年に刊行した『大村市史』上・下巻とその後の調査・研究の成果を踏まえ、新規に編さんするものである。
- ◆本書は『新編大村市史』全五巻の内の第二巻である。本書の内容は中世編で構成され、冒頭には編扉を設けた。
- ◆原則として、記述に当たっては常用漢字・現代仮名づかいを用いるが、固有名詞、歴史用語、引用史料、引用文等は、この限りではない。
- ◆引用史料・引用文は短文の場合は「」を付し、長文の場合は二段下げとした。
- ◆引用史料の判読が困難な文字には、□などで表現した。
- ◆難解な語句についてはふりがなを付し、必要に応じて補足説明を設け、読みやすさに努めた。
- ◆地名の表記は現行地名を用い、研究・分析上の必要に応じて旧字名を使用した。
- ◆本文中の人名は、敬称を省略した。
- ◆本文中のアルファベットの表記は、次のとおり表記する。  
(例) Luis Frois
- ◆mやkmなど、数量の単位については、次のとおりカタカナ表記とする。  
(例) m ↓ メートル km ↓ キロメートル
- ◆数を記述するに当たっては主に漢数字を用い、年月日又は時刻を除く一般数においては十百を入れない。  
(例) 一般数 ↓ 三一五〇ト
- 年月日 ↓ 十月二十六日 時刻 ↓ 二十三時二十七分
- ◆年号の表記に当たっては和暦、必要に応じて中国暦も用い、適宜その下に( )をもって、西暦年を記載した。
- ◆写真・図・表の番号は、それぞれに章単位に一連の番号を付した。写真・図・表の番号及びそれらのキャプション

ンにはアラビア数字を用いた。

◆ 図でスケールを掲載していないものは、縮尺不統一である。

◆ 写真・図・表の出典は、執筆者自身が撮影又は作成したもの以外は、原則として提供者名、作成者名、転載元の刊行物名等をキャプションに掲載した。

◆ 個人情報保護等の観点から個人所蔵の資料は所蔵者名を伏せ、単に個人蔵と記載した。

◆ 本書を執筆するに当たり、参考又は引用した史料・文献は、原則として未刊史料名・論文名は「」、刊行物は「』」を用い、出版元、刊行年を各節末の註に記載した。註に記載のないものは、その後ろに記載した。

◆ 執筆者名は原則として各節末、必要に応じて各項末に記載した。なお、全執筆者名を巻末一覧に記載した。

◆ 写真・図の提供者、作成者及び協力者は、必要に応じてキャプションに掲載し、それ以外はまとめて巻末一覧に掲載した。

◆ 本文中には、現代の人権意識からみて不適切な表現を用いた場合があるが、歴史的事実・事象をそのまま伝えるため、当時の表記どおりに掲載している。



新編

大村市史

第二卷

中世編